皇學館大学
ボランティアルーム

令和５年度 活動報告書

ボランティアルーム
STAFF

目次

指導教員挨拶 1

代表学生挨拶 3

１．コーディネート報告

・令和５年度　ボランティアコーディネート　活動報告 7

2. ボランティアルーム企画・活動

・学内募金活動　活動報告 13

・ちょこっと福祉　活動報告書 16

・くらたやま企画　活動報告 18

・倉陵祭担当（模擬店・展示）　活動報告 21

・季刊誌　活動報告 23

3. アンケート報告

・アンケート報告 29

4. 資料

・令和５年度　ボランティアルーム学生スタッフ一覧 39

令和５年のボランティアルームの振り返り

ボランティアルーム担当教員
教育学部　叶　俊文

新型コロナウイルスの影響が減少することによって、ボランティアの依頼が増えてきている。コロナ下では依頼がゼロという時期もあったが、令和４年には28件のボランティア依頼があり、令和５年には70件のボランティア依頼が生じている。これは令和４年の３倍弱という数になる。コロナ前は年間100件を超えるボランティア依頼があったことを思うとまだまだではあるが、確実に世間の活動は進んできていると考えられる。そして、ボランティア件数が増加するということは、ボランティアルーム学生スタッフの力が試されるということになった。

さて、その力が試されたこの一年で、学生スタッフは力を発揮したのだろうか。ボランティアルームの学生スタッフとして求められるものは何かを考えて動いてくれたのだろうか。先ず考えてほしいことは、自分たちがボランティアに参加したのかということになる。「ボランティアをやってみたい」と思っている学生が来室した時に、当然ボランティアの話になるわけだが、そこで学生スタッフが自身の経験も交えてボランティアの良さを伝えなければならない。そのために学生スタッフ自身がどれだけボランティアに参加しているのかが問われることになる。どうだろうか。ボランティアに参加しているのか。

もう一つ思うことがある。それは全体ミーティングへの欠席の多さである。全体ミーティングは先の一か月から次の一か月への打ち合わせ事項や、全体で考えなければならない事案を話し合う場になる。そのミーティングへの参加は必須になるはずである。そのミーティングの欠席とは、他人任せになっていることを示しているに違いない。他人任せになることは、意思統一ができなくなり、ミスを生じさせることにもなる。力を発揮する以前の問題になろう。年間報告会で、スタッフ間の確認不足や活動でのスタッフ不足などが多くの企画で指摘されている。他人任せになっていることを象徴しているような反省に思われる。

来年度は多くのボランティア依頼が皇學館大学ボランティアルームに殺到するかもしれない。たくさんの施設でこれまで休止にしていた企画が復活することも考えられる。新しい企画を考えていたことができるようになるかもしれない。そして、たくさんのボランティアを求めるようになる。その対応を考えなければならない時期に来ている。もうコロナウイルスの影響を言い逃れに出来なくなっている。それならば自分たちでしっかり地面を踏みしめて活動をしていかなければならないことになる。学生スタッフの持っている力を集約してボランティアルームの運営に傾倒してもらいたい。令和４年から令和５年のコーディネート数は206件から310件に増えている。これだけの学

生をボランティアに導いていることは学生スタッフの努力の結果になる。来年度にはさらに多くの学生をボランティアに誘っていけることを期待している。そのための学生スタッフ自身の研鑽も惜しまないでもらいたい。

再　起

皇學館大学ボランティアルーム　学生スタッフ
文学部国文学科
４年　一橋朋希

依然として脅威を放っている新型コロナウイルス感染症の立ち位置は2023年5月8日よ5類感染症になり、規制も緩和されていった。そのことにより、私たちの生活様式は以前のようにとはいかないものの少しずつではあったが、かつての形を取り戻しつつあった。それは皇學館大学ボランティアルームも例外ではない。前年度より外部からのボランティア依頼数が増加したことやボランティアルーム企画への一般生徒の参加が可能になったことなど世間の動きに合わせてボランティアルームとしての活動も活性化されていった1年になったように思う。

今年度の活動が始まるにあたり真っ先に問題として挙がったものは、コロナ以前のボランティアルームを経験した者がいないということだった。コロナウイルスが5類感染症となりボランティアルームとしての活動がより活発になることが予想される中で、コロナ禍での活動しか経験のない私たちにとって未知の領域であった。そんな中で今年度の1年間はコロナ以前に行っていたボランティアルームの活動への回復を主とし、そのうえで進歩していくとした。

今年度はコロナ収束しつつある中ということもあり、コロナ以前のボランティアルームの活動が1つの指針となった1年であった。しかしながら、今後は世間の情勢はコロナ以前とはまた違うものとなるだろう。そのため以前の活動を継続するだけでなく、現状のものに変化を加えながら新しい道を踏み出すこととなるだろう。今後もボランティアルームの知名度の回復等課題はあるが、コロナ禍という逆境の中で各々できることをやり遂げてきた彼らなら問題ないだろう。一人一人がボランティアルームの一員として力を合わせて大きな一歩を踏み出していけると確信している。

最後になりましたが、ボランティア関係者の皆様に教職員とともに心より感謝申し上げます。どうか今後とも変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

１．コーディネート報告

令和５年度　ボランティアルームコーディネート報告

１．目的

皇學館大学ボランティアルームでは、ボランティア活動を求めている学生の支援を目的として活動している。ボランティアルームに所属する学生スタッフが、ボランティアを求める学生に対してボランティアをコーディネートすることを中心に考え、活動を行なっている。そこで、ボランティアのコーディネートについて今年度の活動を報告する。

２．コーディネートの活動内容

学生スタッフの仕事の一つであるボランティアコーディネーターとしての活動は、三重県内の社会福祉協議会や地域の自治体などから依頼されるボランティアを受け付け、学生にボランティアを提供することである。学生にボランティア情報を提供することで、地域と学生をつなぐ役割を担っている。

学生へのボランティア情報提供として、2 号館 1 階ボランティアルーム横と 6 号館 1 階の掲示板、LINE、Instagram（インスタグラム）、X（エックス）での発信を行ってきた。

SNS での情報発信では、Instagram のストーリー機能を用いてボランティア募集状況や開室時間を発信することで手軽に情報をチェックできるよう情報発信に力を入れ、学生への参加促進を図った。

ボランティアコーディネートを学生スタッフが行うことにより、気軽にボランティアに参加することができるため、学生のボランティア参加をより促すことができると考える。しかし、学生スタッフがボランティアコーディネートを行うにあたり留意点がある。それは、地域と学生の関係を対等かつお互いに成長できる関係へ調整をすることである。図 1 のようなつなぐ役割を円滑にコーディネートを行っていくために、ボランティア依頼先や参加学生と連絡を取り合うことや、大学とボランティアルーム間の事務処理を学生スタッフ一人ひとりが責任やコーディネーターとしての意識を持ち、活動に取り組んでいく必要がある。

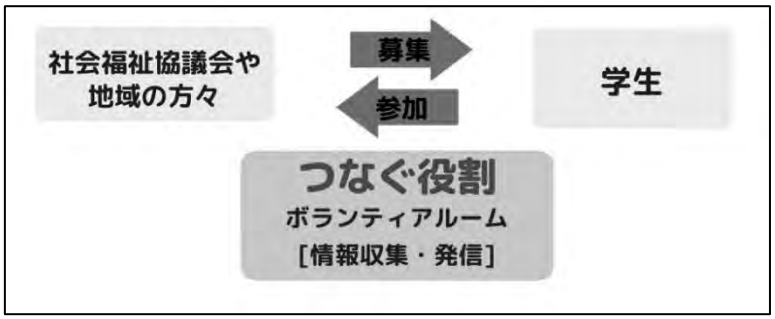


図１　ボランティルームの仕組み

３．コーディネートの状況

今年度の地域から依頼されたボランティア情報件数は 101 件（随時ボランティア含む）であり、コーディネート件数は48件であった。コーディネート人数はのべ228人になる。コーディネート件数は昨年よりも 18 件増加し、コーディネート人数は昨年より 48 人増と新型コロナウイルスが 5 類に分類されたこともありコーディネート件数や人数は大幅に増加した。依頼件数すべてのボランティアをコーディネートすることができず、同じ学生が複数のボランティアに参加していることから実人数もっと少なくなる。そのため、大学内でのボランティアに参加する学生は少ないと言えるだろう。内訳は以下の通りである。

	ボランティア総件数	コーディネート件数	コーディネート人数
令和 5 年度	101 件	48 件	228 人
令和 4 年度	53 件	30 件	198 人

ボランティアルームでは以下のように依頼されたボランティアを 3 つの種類に分類し、情報を発信している。

①子どもサポート：子供を対象としたイベントのスタッフ、特別支援学級活動、託児補助等
②地域援助：地域イベント、コンサートスタッフなど
③福祉系：障がい者（児）福祉競技スタッフ、福祉施設イベントスタッフなど
3 つの種類のボランティアの情報件数は次の通りである。

	ボランティア件数	コーディネート件数	参加人数
子ども	39 件	16 件	80 人
地域	33 件	19 件	118 人
福祉	29 件	11 件	30 人

今年度は、ボランティアの依頼が 101 件と前年度に比べて大幅に増加した。子どもボランティアは 39 件（随時 11 件）、地域ボランティアは 33 件（随時 1 件）、福祉ボランティアは 29 件（随時 10 件）となっている。ボランティア件数は新型コロナウイルスが 5 類に分類された影響もあり大幅に増加し、それに伴い、コーディネート件数や参加人数も増加した結果となった。また、昨年度では子どもボランティアが半分を占めていたが、地域のお祭りなど新型コロナウイルスの影響で開催ができなかったイベントの開催が多く、地域ボランティアのボランティア件数の顕著な増加が見られた。

昨年度から新たに導入された公式 LINE では、登録者数の増加が新たに課題として挙げられていた。今年度ではボランティア参加人数が増加したため、ボランティアルームに来

室した学生に公式 LINE の呼びかけを行ったり、公式 LINE の QR コードを掲示板に貼ったりし、公式 LINE の普及に努めた。しかし、ボランティア情報を登録学生に共有するために一斉送信を検討しているが準備が整っておらず、導入までは至っていない。公式 LINE からのボランティア情報の呼びかけが今後の課題となる。

前年度までのボランティア依頼件数とコーディネート率を比較すると図 2 の通りである。

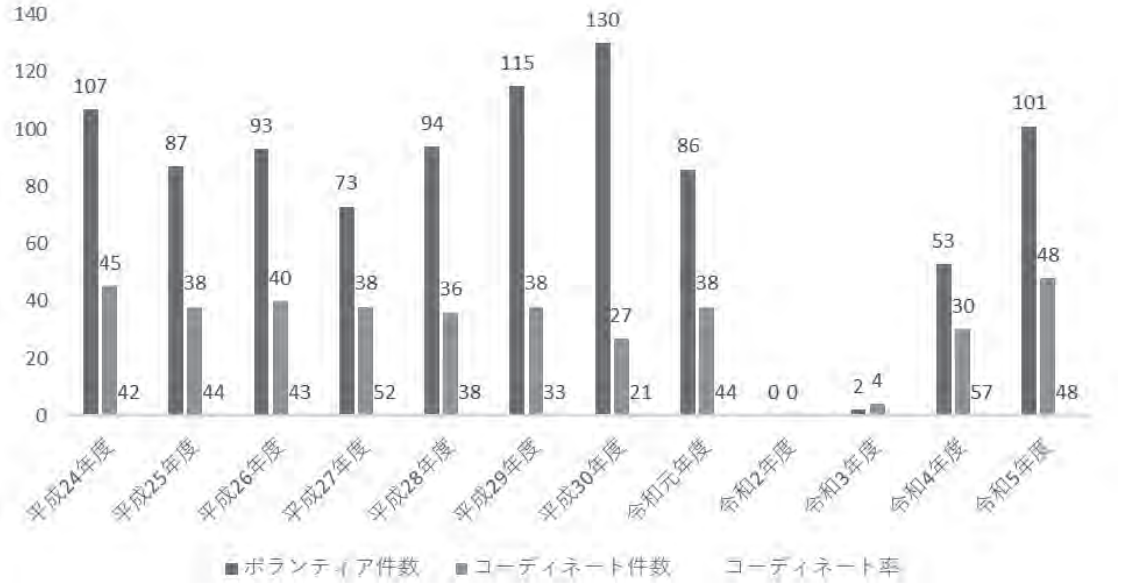


図 2　各年度ボランティア件数

令和 2 年度から新型コロナウイルスの影響により一時期はボランティア件数が 0 件であったが、昨年度から人数制限や感染症対策をしながらボランティアの募集の再開が始まった。今年度では、ボランティア件数、コーディネート件数ともに新型コロナウイルス流行前と同じ値となった。しかし、参加者 0 件で依頼者に返答をしたボランティアも見られ、参加者がいないという状態が続くと皇學館大学ボランティアルームから参加者を募ることは難しいというイメージがついてしまう可能性がある。このようなイメージを与えないためにも、参加者を集められる募集方法の見直し、学生に向けての積極的な声かけ、学生スタッフの参加などアプローチの改善を行っていかなければならない。

４．ボランティア登録学生についての詳細

ボランティア登録学生からみと、今年度の公式 LINE の登録者数は　320 人、Instagram のフォロワーは 402 人、X のフォロワーは 366 人であった。

昨年度では、公式 LINE 開設や学生向けのガイダンス不開催によるアピール不足などが挙げられていた。今年度では、各学年ガイダンスが行われたため、ボランティアの参加が見込める 1～3 学年のガイダンス内でボランティア参加の呼びかけを行った。また、今年度から新入生歓迎会が再開されたため、新入生に向けてボランティア参加や学生スタッフの加

入についての呼びかけを行った。ボランティアルームの認知という点ではガイダンスや新入生歓迎会という大きな行事は効果的であるといえる。しかし、学生スタッフがボランティアに行きたい、気になっている学生に対し、不安に感じている学生と一緒に参加や不安の解消といった行動や呼びかけがさらなるボランティア参加者の増加につながっていくのではないだろうか。そのために、学生スタッフ一人ひとりがボランティアに積極的に参加し、その経験や楽しさ、喜びを新たな学生に伝えることでボランティアの輪を広げていく必要がある。

５．今年度のボランティアルームとしての活動

前年度では業務の円滑化、学生スタッフの積極的なボランティア参加を課題としており、学生スタッフの勉強会の開催による業務効率の増加に加え、一般学生の連絡手段である公式 LINE をボランティアルーム開室時間外にも閲覧できるようにすることで情報を早急に得ることができ、さらなる業務の効率化を図った。昨年度の反省や課題を踏まえて学生スタッフのスキルアップを行うことができた。また、昨年度ではボランティア増加に伴う書類提出の不備がいくつか見られたが、対策として提出期限日の短縮やボランティアルーム内の月間予定表に締め切り日を記入するといった対策を行い、担当スタッフだけでなく全学生スタッフが把握できるように見直し、書類の不備等のミスは減少した。しかし、ボランティア参加学生の急な欠席連絡や当日の集合場所の確認の連絡など開室時間外の急を要する連絡が多々見られた。このようなことが起こらないように、依頼者の連絡先の伝達や欠席連絡の締め切りといった細かいルール作りも行っていかなければならない。今後ボランティアルームを発展していくにあたって、ボランティア依頼についての学生スタッフ間での的確な情報伝達、書類提出の管理といった業務を臨機応変に対応していかなければならない。さらに、コーディネート件数を継続して増やしていくためには、学生スタッフ全員の積極的なボランティアの参加が必要になってくるだろう。ボランティアルームの本来の役割であるボランティアを求める方々とボランティアに参加したい学生をつなげるためには、学生スタッフ自らのボランティア参加経験や積極性が対応にもつながってくると考えている。活動を発展させていくために、学生スタッフ一人ひとりの行動力が必要となってくるだろう。コーディネートを行っていくことも大事であるが、数字を挙げることだけにとらわれず、ボランティアの楽しさや魅力を伝え、ボランティアを身近に感じてもらう本来のボランティアルームの形を忘れずに活動を行っていかなくてはならない。学生スタッフが多くのボランティアに参加し、経験を積んでいくことは自分の為にもなり、スタッフとしてボランティアに参加する学生のサポートを行うなどボランティアの良さを伝えることができる。私たちのボランティアへの想いがいつか大きな花を咲かせられるように、スタッフ一同改めてボランティアと向き合っていきたい。

【文責：文学部コミュニケーション学科　３年　竹内七菜実】

2. ボランティアルーム企画・活動

学内募金活動　活動報告

〈トルコ・シリア地震支援募金〉

１．目的

令和５年２月６日にトルコ南東部とシリア北部の広い範囲で強い地震が発生した。この状況を受けボランティアルームは、トルコ・シリアで救援物資やシェルターの支給、被災者への心理社会的サポートやカウンセリングを行っている国連 UNHCR への寄付を募り、被災した人々の支援を行うことを決めた。また、大学内で募金を呼び掛けることで、学生がボランティアルーム及びボランティア活動に興味を持ち、ボランティア活動に手軽に参加するきっかけにしたいと考えた。

２．活動内容

実施日：令和５年６月 26 日(月)と６月 30 日(金)の２日間

実施時間：昼休み（12:40～13:30）

活動場所：皇學館大学　倉陵会館１階ロビー

内容：ボランティアルームスタッフが募金箱を持ち、募金の呼びかけを行う。

寄付先：国連 UNHCR 協会

３．活動報告

活動前には、皇學館大学ボランティアルームのインスタグラムを活用し、募金活動について宣伝を行った。活動場所は、昼休み中多くの学生が通る食堂に設定し、活動中は看板を使用したり、声を出したりして学生に募金の呼びかけを行った。現金の取り扱いについては、鍵付きの募金箱を使用し、スタッフが手に持ちながら募金を行った。

活動後は、寄付金の集計作業を皇學館大学管財担当に依頼した。6 月 26 日は 2,124 円、6 月 30 日は 2,764 円、2 日間合計で 4,888 円の寄付金が集まった。集まった寄付金は国連 UNHCR 協会へ寄付を行った。

４．反省

評価できる点は、SNS を活用して宣伝活動を行えた点である。反省点としては、募金活動の内容について工夫が足りなかった点や、直前の準備が遅れたことで募金活動の開始が遅れてしまった点が挙げられる。募金活動の内容については、災害等が起こった際にすぐに募金活動の準備を開始できるようにしておくことや、学生にとって身近に感じやすく理解しやすい内容の募金活動にしていくことが必要であると考える。募金活動の開始が遅れてしまったことについては、準備を担当するスタッフと密に連絡を取り合うことや、すぐに募金活動が行えるような工夫をしておくことが必要であると考える。

〈アフガニスタン地震救援金〉

１．目的

令和 5 年 10 月 7 日、アフガニスタン西部ヘラート州でマグニチュード 6.3 の地震が発生し、その後も同クラスの余震が相次いだ。震源地付近で揺れが強かったジンダヤン地区では 12 の村が壊滅的な被害を受けた。この状況を受けボランティアルームは、アフガニスタン地震救援金を受け付けている日本赤十字社に寄付を行うことを決めた。多くの人が集まる倉陵祭の模擬店に募金箱を設置する形で募金活動を行い、訪れた人がボランティア活動やボランティアルームの活動、募金活動に興味を持ち参加するきっかけ作りの場としたいと考えた。

２．活動内容

実施日時：令和 5 年 10 月 28 日 10:00～18:00、令和 5 年 10 月 29 日 10:00～16:00

活動場所：倉陵祭ボランティアルーム模擬店（皇學館大学芝生広場）

内容：ボランティアルームの模擬店に募金箱と看板を設置し、訪れた人にスタッフが協力の呼びかけを行う。事前にボランティアルームの SNS で告知を行う。

寄付先：日本赤十字社「2023 年アフガニスタン地震救援金」

３．活動報告

今回は、倉陵祭の模擬店で活動を行うために、倉陵祭担当者と連携を取りながら準備を進めた。屋外で現金を取り扱うため、設置した募金箱の近くに必ずスタッフがいるようにすることや、募金箱を必ず施錠した状態にしておくことに注意した。

活動前は、皇學館大学ボランティアルームのインスタグラムを活用し、募金活動について宣伝を行った。また、模擬店に設置する看板も事前に作成した。

活動では、模擬店担当のスタッフに協力してもらい、模擬店内に募金箱を設置する形で募金活動を行った。模擬店の前には看板を設置し、目立つように工夫をした。

活動後は、当日と翌日が共に休日であったため、模擬店終了後に鍵をかけたままの募金箱をボランティアルームに保管した。翌々日に寄付金を回収し、管財担当で機械を借りて集計を行った。その後、2 日間で集まった合計 5,274 円を日本赤十字社に寄付した。今回の活動の結果を周知するためにポスターを作成し、学内にある 2 号館と 6 号館の掲示板に掲示した。

４．反省

評価できる点としては、倉陵祭で募金活動を行ったことで、気軽にボランティアに参加してもらえた点や、地域の方々にも参加してもらえた点が挙げられる。また、ポスターを掲示することで、募金活動の結果を確認してもらいやすくなった。反省点としては、インスタグラムでの宣伝の回数が少なかった点や、模擬店スタッフへの説明が行き届いていな

かった点が挙げられる。SNS では繰り返し宣伝を行うことや、募金担当のスタッフだけでなく、ルームスタッフ全体に募金活動についてより詳しい説明を行うことが必要であると考えた。

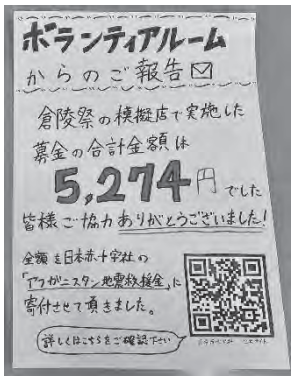
5．まとめ

令和５年度は「トルコ・シリア地震支援募金」と「アフガニスタン地震救援金」の２つの募金活動を行った。「トルコ・シリア地震支援募金」では合計 4,888 円、「アフガニスタン地震救援金」では合計 5,274 円の寄付金が集まった。全体の反省点としては、１月に能登半島で発生した地震の募金活動が行えなかったことが挙げられる。これからは、災害発生時に早急に募金活動を行えるよう、普段から意識を高めておくことが必要である。また、日本国内の災害に目を向けるなど、学生にとって関心を持ちやすい内容にしていくことも必要である。募金を行うこと自体だけではなく、それぞれの国や地域の状況や、寄付先の団体などについて知る機会となるように、宣伝の方法や募金活動の方法について工夫していきたい。

6．活動の様子

トルコ・シリア地震支援募金

アフガニスタン地震救援金



報告のポスター

【文責：教育学部教育学科　２年　薗部萌果】

ちょこっと福祉　活動報告

１．目的

ちょこっと福祉のグループは、例年、伊勢市社会福祉協議会さんとの共催という形で、伊勢市内の小学生を対象に「ちょこっと福祉体験」を行っている。今年度は、新型コロナウイルスの制限が緩和されたこともあり、数年ぶりに皇學館大学で開催となった。

福祉体験として、車いす体験と高齢者擬似体験を行った。車いすのサポート方法を学ぶとともに高齢者の身体状況を把握し、自分たちが出来ることは何かを考えるきっかけとすることが目的である。また、自分だけのエコなおもちゃ体験として、ペットボトルキャップを用いた工作を行った。この目的は、資源を有効活用した工作を行うことで、環境への関心を高めて、地球に優しい取り組みにはどのようなものがあるか考えるきっかけにする事である。

２．活動内容

活動日時：令和５年８月 20 日（日）13：30～17：15

活動場所：皇學館大学　７号館２階 722 教室

対　　象：小学４年生から高校３年生

参加人数：小学生２名、学生スタッフ３名

活動内容：高齢者擬似体験(高齢者擬似体験装具を装着して、学内をめぐる)

車いす体験(車いすの操作方法を学び、介助の体験をする)

ペットボトルキャップを使ったおもちゃ作り(オリジナルのマグネットの作成)

３．活動報告

「高齢者擬似体験」では、子どもたちは実際に「高齢者擬似体験装具」を装着し、学校内を巡りながら、体の重さや肘、腰の動きの困難さを体験した。更に、白内障を体験できるゴーグルを装着し、視力の衰えや、見やすい色と見にくい色を体験した。このような体験を通じて、子どもたちは高齢者が日常生活で直面する困難を理解する機会を得たと感じる。

「車いす体験」では、子どもたちが車いすの各部位と操作方法についての説明を受けた後に、実際に車いすを操作しました。大学の教室内やスロープ、段差、エレベーターなどの場所での擬似体験を通じて、子どもたちは車いすの操作方法を学び、また車いすを押すという介助の体験をした。

「エコなおもちゃ作り体験」では、ペットボトルキャップなどを活用して、オリジナルのマグネットを作成した。子どもたちは、自分が好きな動物をモチーフに楽しみながら工作に取り組んでいた。

《活動の様子》

４．参加した子供たちの声

・車いすの移動が楽しかった

・ペットボトルの工作が楽しかった。

・また参加したいです。

・工作をもっとやりたいです。アクセサリー作りに興味があります。

５．反省、まとめ、今後の展望

今年度の活動を振り返って、良かった点は、高齢者擬似体験や車いす体験の福祉体験を通して、参加者が高齢者や障がい者の立場になって、当事者の気持ちを考えられたことである。参加者が少なかったために、家族で福祉体験を行ってもらったが、親子で楽しみながら体験に取り組んでいた。ボランティアルームスタッフも、サポートに入る中で、高齢者擬似体験装置を装着した状態での移動の大変さや車いすを押す立場になった時の声掛けの大切さを実感し、多くの学びを得られた。また、企画の進行に関しては、外で車椅子体験をして疲れてしまった子供を見て、次のプログラムを室内で座ってできる工作に切り替えるなど、参加者の様子に合わせて臨機応変に変更しながら進められた点が良かったと感じる。

一方、反省点は、活動を行うにあたって、介助方法やユニバーサルデザインなどについて学生スタッフの知識不足を感じる所があった点である。事前に車いすの介助方法やユニバーサルデザインなどについて、ルームスタッフの間で知識の共有や体験を行うことで、この福祉体験をより充実したものにしたい。

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学部　２年　野澤麻衣】

くらたやま企画　活動報告

1．目的・目標

今年度から新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に変更になった為、感染対策には気をつけつつ、以前行っていた対面でのイベント企画を行えるように取り組んだ。目的は以下の 2 点である。

① 勉強会➡認知症についてや「くらたやま」の利用者の日常生活や接し方について学ぶ。

② 交流会➡勉強会で学んだことを活かして利用者と交流をする

この 2 点の目的を果たすために、GoogleMeet で企画メンバー同士、老人ホームくらたやまの職員の方と企画リーダー・副リーダーで話し合いを行った。

2．活動内容

勉強会

日　時：9 月 28 日(木)　18 時 00 分～19 時 30 分

場　所：介護付有料老人ホームくらたやま

参加者：6 名

内容　①利用者の方々にはどのような症状をお持ちであり、普段施設内ではどのような様子で過ごされているのか

②認知症とはどのような症状であり、どのような接し方が適しているか

の 2 点を職員の方に説明していただいた。

施設の方との交流会

日　時：11 月 25 日(土)　13 時 30 分～15 時 00 分

場　所：介護付有料老人ホームくらたやま

参加者：3 名

内容：利用者の方々が、施設の中でいつもおやつを食べている時間帯に、企画活動参加者と利用者の方で交流をした。

この 2 点は、「ZOOM」を使ったオンライン上での職員の方との連絡と、老人ホームくらたやま様の施設内で、職員の方と話し合いをして内容を決めた。

3．活動報告

今年度も企画メンバーのみで活動した。主な活動は以下のとおりである。

① 勉強会

介護付有料老人ホームくらたやまでは認知症の利用者の方が多いため、認知症の方との接し方について学んだ。資料は全てくらたやまの職員の方が用意してくださっており、企画メンバーはその資料をもとに勉強した。

・認知症とは記憶や思考などの認知機能が低下し、日常生活や社会生活に支障をきたすことであり、原因や種類が異なること。
・利用者の方は、症状のレベルに応じて自力で歩いて移動できる方や、ベットに寝たまま移動する方がいること。
・利用者の方は、昔ながらの伊勢弁を使うことが多いため、覚えておくと話のネタになること。
例
・利用者の方は、地元のことを話すことが好きなため、伊勢のことについて知っておいた方が良いこと。
・利用者の方と話すときは、少し耳に近づいて大きすぎない声でゆっくりはっきりと話すことが大切であること。

などを学んだ。

② 対面での企画

くらたやまでは決まった時間におやつを作っており、企画としてボランティアルームのスタッフがおやつを作って利用者の方に召し上がっていただく予定だった。しかし、企画リーダーの連絡が遅く、ルームスタッフがスイートポテトを作ることが出来るようにスケジューリング出来なかったことや、時間の都合が合わなかったため、当日は職員の方に作ってもらう事となった。利用者の方がスイートポテトを召し上がって頂いている時からおやつの時間が終わる時間まで、ボランティアルームスタッフは利用者の方と、「昔どんなことがあったのか」や、「伊勢のことについて」などお話をして交流をした。スイートポテトを食べながら、利用者の方との交流を楽しむことが出来たが、勉強会に参加できなかったスタッフもいたため、少し困惑した場面もあった。

4．参加学生の声

・認知症のことについての理解が深まって、とても勉強になった。
・利用者の方々が伊勢弁を使って話すときがあると学んだので、伊勢弁を覚えた方がよいと思った。
・スイートポテトをおいしそうに食べている姿を見て、嬉しくなりました。
・利用者の方々とうまく話すことが出来るか心配だったけど、実際に話してみたら楽しく会話が出来て良かった。

5．まとめ

今年度から施設で対面形式の企画を実施することが出来た。来年度からさらに交流の機会を増やしたり、新たな企画にチャレンジしたりしてみたいと思った。しかし、これまでと同様で感染症対策については徹底しながら企画を行うことを念頭においておく必要がある。資料の作成やスイートポテト作りが職員の方に任せきりにしてしまった部分が多く見られたので、来年度からは企画メンバーが協力する場面を増やすべきだと反省した。また、内容をリーダー、副リーダーと職員の間だけで決め、他の企画メンバーには事後報告のような形になってしまっていたため、スイートポテト作りでは職員と企画メンバーと内容の認識の違いが出てしまった。情報の共有を確実にするべきであると反省している。

新たなことにチャレンジすることも大切だが、職員と話し合いを重ねながら可能な範囲で企画を行うこと、勉強会や対面形式の企画を行う目的の明確化や、一般学生への資料配布などをすることを来年度の課題としていきたい。

【文責：教育学部教育学科　２年　原　一貴】

倉陵祭担当（模擬店・展示）　活動報告

１．目的

この活動の目的は、「模擬店で出店し合わせて展示を行うことで倉陵祭に来場してくれた方に向けてボランティアルームの周知、大学生のボランティア参加意欲促進を狙うこと」である。倉陵祭（模擬店出展、展示団体に参加し、活動内容やボランティアルームの存在を示すこと、積極的に参加している姿を見ていただくことで、認知度向上に繋げたい。また、スタッフ同士が交流するいい機会にもなるのではと考え、活動を実施した。

２．活動内容

【模擬店】

・スモア（焼いたマシュマロをクッキーで挟んだお菓子）を 200 円、
　ソフトドリンク（お茶、コーラ、ミルクティーなど）を 100 円で販売。
・募金企画と協力し模擬店で募金活動を実施。
・アンケート企画と協力しアンケートの協力も仰いだ。

【展示】

・「出張ボランティアルーム」をテーマに 732 教室を装飾してボランティアルームの紹介、活動展示を行った。
・ボランティア参加受付を行った（在学生向け）。
・来室していただいた子供向けに折り紙の体験も企画した。

３．活動報告

【模擬店】

・スモア用のクッキーが切れたため、営業終盤は、焼きマシュマロ（100 円）に変更して販売した。
・売上：78700 円、支出：51180 円、利益：26890 円
　今回、数年ぶりの開催となった倉陵祭での模擬店出店にあたってノウハウの少ない中で準備を行い、スタッフ間で協力をして運営したくさんの学生・一般の方々に購入していただき、完売して利益も上げることができた。今回出店・営業を行ったことで来年へノウハウをしっかり残すことができた。

【展示】

展示は、ボランティアルームの活動紹介・ボランティア参加・スタッフ希望受付を考「出張ボランティアルーム」をテーマに準備し活動した。しかし、模擬店の準備との両立が難しく準備不足・借りた教室の立地の悪さが重なり、来場者はほとんどいなかった。今回の

経験から模擬店をやるときは展示をせず模擬店に集中したほうがより効率的にできるのではないかと考える。

４．反省

・スモアの製作工程に時間がかかった。
・模擬店と展示の両立をうまくできなかった。
・展示で借りた教室のエリアの場所が悪く人がなかなか集まらなかった。

５．まとめ

今回の倉陵祭での活動から、模擬店と展示の両立はかなり難しくどちらかの質が落ちてしまうことが分かった。自分達の準備不足もあったが、来年は模擬店のみで行った方が、質も上がり負担も減るのではないかと考える。模擬店の中に何かボランティアルームの活動内容を紹介できる要素を少しでも盛り込めたらより良くなると感じた。模擬店で制作するものも工程の少ないものにして営業をスムーズにする必要があると気づくことができた。来年度も検討を重ねより良いものにしていきたい。

６．活動の風景写真

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科　２年　岩野倖汰】

季刊誌　活動報告

１．目的

季刊誌はボランティアに興味を持ってもらうことやボランティアルームの認知度を上げることを目的として、学生用と外部用の２種類を作成している。

学生用の季刊誌はボランティアへの参加促進やボランティアルームの活動にも興味を持ってもらうことを目的に、募集中のボランティアの情報や参加したボランティアの活動報告、ボランティアルームが企画したボランティアの活動報告を載せている。社会福祉協議会などを通じて配布している外部用の季刊誌には、ボランティアルームの概要や活動内容を主に掲載し、ボランティアルームの存在や活動を知ってもらうことを目的に作成している。

２．活動内容

季刊誌を発行するにあたってミーティングを行い、担当者と相談しながら年間スケジュールを作成した。今年度は学生用(夏号・秋号・冬号)の３号、外部用(秋号)の１号を発行した。どちらの季刊誌も見やすいものとなるように心がけて作成した。

学生用では、昨年度までは季刊誌を 30 部発行していたが、あまり学生の手に届いていないことから、今年度はボランティアルームの Instagram に掲載する形へと切り替えた。ボランティアルームの Instagram をフォローしていない学生の目にも届くように、ボランティアルームの掲示板への掲示を行い、これらを学生用の季刊誌の発行とした。

外部用の季刊誌は三重県社会福祉協議会、松阪市社会福祉協議会、伊勢市社会協議会、伊勢志摩バリアフリーツアーセンター、四日市市社会福祉協議会、玉城町社会福祉協議会の６団体に発行を行った。

３．活動報告

	発行予定月	発行月(学生用/外部用)
夏号	7 月	7 月/なし
秋号	10 月	10 月/11 月
冬号	12 月	12 月/なし

今年度は季刊誌の担当スタッフの人数の関係上、学年別で季刊誌の作成を担当した。学生用を二年生が担当し、外部用を三年生が担当した。発行予定通りに季刊誌の発行を行えるよう、発行月の１ヶ月前に作成の開始を呼びかけた。しかし、外部用夏号の季刊誌の発行が大幅に遅れ、担当者が実習期間に入ってしまったために、急遽外部用の季刊誌夏号の作成を二年生が引き受ける形となった。秋号の発行時期と近づいてきたこともあり、外部

用秋号の季刊誌に夏号に掲載予定だった内容を一部掲載した。外部用冬号の季刊誌では同じ事態を防ぐため、制作の呼びかけ等を行ったが、担当者音信不通のため発行することができなかった。

４．反省

【内容について】

今年の季刊誌では昨年度までの季刊誌の掲載内容と変わらない内容を掲載し、どの号も掲載内容はほとんど変わっていないものであった。そのため、来年度からは学生へのアンケートの実施を行う、外部の方からも話を伺うなどして、そこから新たな掲載内容の検討を行い、より学生や外部の方の興味や関心を引くもの、必要な情報が手に入るものを目指していきたい。

【配布方法について】

今年度は学生用を掲示及び Instagram への投稿で行い、外部用は紙媒体で配布を行った。Instagram の活用により、以前よりも多くの人に季刊誌の存在を知ってもらう機会にすることができたため、学生用のみならず、外部用も Instagram に投稿することも検討していきたい。現在ボランティアルームの Instagram のフォロワーは学生がほとんどであるため、外部用の季刊誌を Instagram に掲載するにあたってはフォロワー層の拡大が必要である。また、外部用を Instagram に掲載する際には、Instagram を見ることができない人の目にも届くように、紙媒体での配布を行っていきたい。

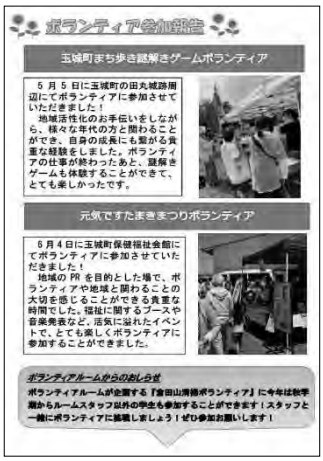
【作成担当について】

今年度は結果的に２回も発行予定であった季刊誌を発行することができなかった。そのため、来年度からは発行予定月を決めるだけでなく、発行予定月のはじめに進捗状況の報告の義務化や発行予定月に締め切り日などを設定し、その日までに発行することができなかった場合には、直ちに季刊誌のグループへの進捗の確認あるいは報告をしあうなど対策を行う必要がある。今年度のように連絡が取れない場合、その日を境として、その季刊誌の作成を今後どうするのかの話し合いや、新たな作成者の設定を行い、発行することができないという事態を避けられるように対策を講じたい。作成が難しいようならば、それを前の月までに報告あるいは相談するなど当然のことを行うよう日々呼びかけ、担当者以外が協力することができる体制を常に整えていきたい。また、外部用夏号の引き継ぎの際に、外部用の季刊誌の印刷などに関わる方法を知らず、印刷の準備にもかなりの時間を要したため、担当者以外も作成方法を知るために、作成前に全員で確認する機会を設ける必要がある。

６．まとめ

今年度は昨年度の反省から新たな季刊誌の掲載方法を検討し実践することができ、外部の方に見やすくなったとの声かけをいただくことができた。しかし、今年度は外部用を２回も発行することができなかった。結果的には反省の多い活動内容となってしまったため、来年度は全員が責任感を持って取り組んでいきたい。また、季刊誌のメンバーと集まる機会を設け、常に相談しやすい雰囲気作りや、新たな掲載内容の検討や作成ツールの話し合いなどを積極的に行い、より見やすく、読みやすい季刊誌の作成を行っていきたい。

７．活動写真



【文責：教育学部教育学科　２年　澤村佳純】

3. アンケート報告

アンケート結果報告

１．目的

今回のアンケートは、「新型コロナウイルスによる行動制限が解除されはじめ様々な面で自由度が高まるなか、ボランティアルームとして学生に対してどのように関わっていくのかを図る」、「ボランティア活動によりどんな力が付くのか理解し、今後の活動に活かしていく」の２つを目的として調査を行った。

２．活動内容

前年度と同様にアンケートの回答はすべて Google Forms に統一した。今年度は回答ページの QR コードをモニターに映しペーパーレス化を図った。

新型コロナウイルス感染症の規制・自粛か緩和され、新型コロナウイルス感染症拡大期に比べボランティアの依頼が多くあった。しかし学生の参加意欲が低下していると感じ、昨年度のアンケートに引き続き、ボランティアに参加するとどのような力を培えるのかといった、実際にボランティアに参加したことを想定した項目を取り入れた。また、本学の学生がボランティアに何を求めているのか、ボランティアルームは学生とどのような形で関わっていくべきなのかなど、ボランティアルームの指針に関する項目は昨年度のままにしてアンケートを行った。

アンケートの実施は以下の通りである。

開催期間：2022 年 12 月 18 日～2023 年 1 月 31 日

対象者：文学部　約 1,000 名
　　教育学部　約 950 名
　　現代日本社会学部　約 500 名
　　合計　約 2,450 名

方法：Google Forms でアンケートの作成。また、Google Forms の QR コードが載った画面を許可がとれた講義で配布。

アンケート内容：アンケート項目は以下の 10 項目である。

①学年・学科
②ボランティアルームの認知度
③ボランティアルームの活動内容
④ボランティア情報の入手方法
⑤今年度のボランティア参加率
⑥今年度参加してみたいと思うボランティア
⑦参加してみたいと思う具体的意見
⑧今後参加してみたいボランティアの分野
⑨ボランティアに参加することによって、何が得られると思うか
⑩ボランティルームへの意見・要望・改善点

３．結果報告

文学部約 1,000 名、教育学部約 950 名、現代日本社会学部約 500 名の合計約 2,450 名にアンケートを行った結果、得られた回答数は 487 件であった。昨年のアンケート結果は 331 件、一昨年のアンケートは 47 件であり、去年に比べて約 1.5 倍、一昨年に比べて約 10 倍に増加している。以下、得られた結果を順に示していく。なお、【複数回答可】のある項目は「各選択肢の回答数÷全回答者数×100」で算出するため、各選択肢の割合を合計しても 100%にはならない。

①あなたの学年を選んでください。

1 年	305 人
2 年	168 人
3 年	11 人
4 年	3 人

①-2 あなたの学科を選んでください。

神道学科	3 人
国文学科	5 人
国史学科	4 人
コミュニケーション学科	12 人
教育学科	310 人
現代日本社会学科	153 人

学年は多い順に「1 年」「2 年」「3 年」となっており、学科では「教育学科」が他の学科よりも抜きん出て多い結果となった。

今回のアンケートでは QR コードを教室のモニターに映すことで集計を行ったが、講義はじめの 5 分をいただき、調査を実施したため時間の制限があり回答できなかった学生もいたと考えられる。

次回のアンケートでは、講義時のアンケート方法以外にも、SNS での集計方法を充実させる必要があり、そのためにはボランティアルームのＳＮＳ運用を充実させる必要がある。

②ボランティアルームを知っていますか。

はい	393 人
いいえ	94 人

③ボランティアルームの LINE もしくは SNS に登録していますか？

登録している	84 人
登録していない	403 人

ボランティアルームの認知度と登録の項目では、認知度「はい」が 80%以上に対し、登録「いいえ」が約 80%の結果となった。

今年度はガイダンスでの紹介を行うことができたため、1 年生などにもボランティアルームを知ってもらえる機会があったこともあり、80%以上の学生が「ボランティアルームについて知っている」と回答している。しかし全員が認知している結果には至らなかった。この値は少ないとは言い難く非認知者 10%以下を目標に、学生にボランティアルームを認知してもらえるよう、掲示物の更新や、SNS での活動報告など、情報の拡散をより積極的に行っていくべきである。

登録については、ボランティアルームに登録する機会が少ないことと、「ボランティアルームを知っている」と回答した学生が多かったにもかかわらず、「登録していない」と答えた学生が多く、登録の機会を増やすことが課題である。

登録の機会については、ボランティアルーム内、パンフレット、ボランティアルーム横と 6 号館の掲示を設けているが、ボランティアに興味がある学生であっても、自発的な登録機会を逃してしまうとボランティアルームを登録しないままにしていると考えられる。学生の自発的行動を待つだけでなく、ボランティアルームが率先してＳＮＳのフォローや登録の機会を作り出す必要がある。

「ボランティアに興味が無い、あるいは自分には必要がない」と考える学生に対しては、ボランティアに参加することで得られるメリットを、参加者を通じて発言することが必要である。そのほか、ボランティア後に参加者のアンケートを取るなどの活動を取り入れることも考えなければならない。

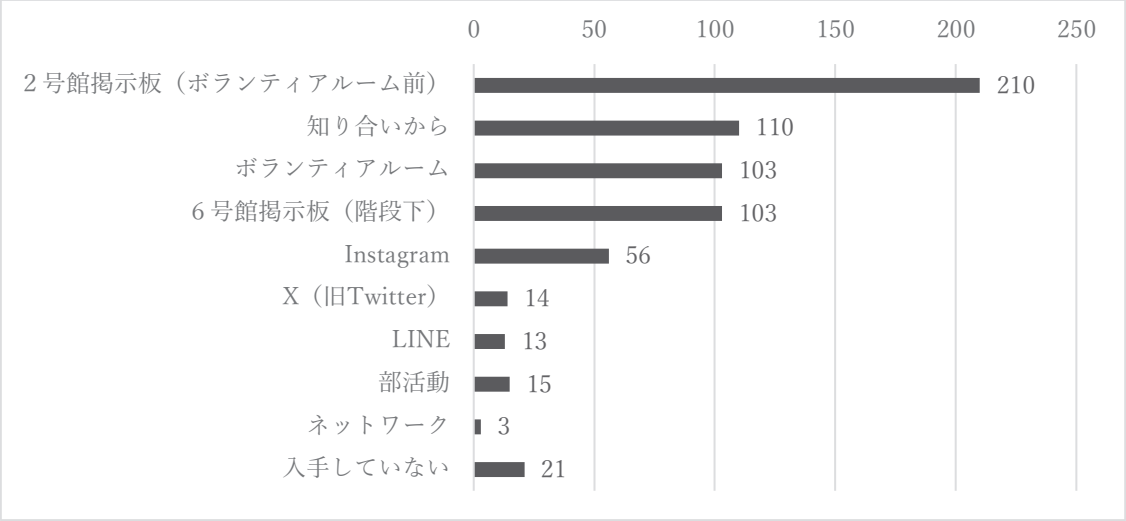
ボランティアの強制参加を警戒している学生に対しては、ボランティアルームの正確な情報を伝えるために説明会を開くなど、ボランティアルームについて知る機会を作るようにしていくべきだろう。新型コロナウイルスが 5 類へと引き下げられ 2 年経つことから、活動の幅もさらに拡大すると考えられる。ボランティア参加者を増やすために、新型コロナウイルス流行以前の活動を取り入れや新しい登録の機会をルームスタッフ内で考えていく必要がある。

④ボランティアルームの活動を SNS などで見たことがありますか？

はい	148 人
いいえ	339 人

「ボランティアルームの活動をSNSで見たことある」という学生は約30%であった。ボランティアルームの認知度に対して、SNS の活動を知らない学生が多いということが分かった。このことから、SNS の発信を活発に行っていくだけでなく、SNS の広報活動も併せて行う必要があると考えられる。

⑤ボランティア情報を普段どこで入手していますか？



ボランティアルーム横の「2 号館掲示板」が一番多い回答となった。学内掲示は様々な連絡で用いられ、学生も頻繁に確認するため、掲示板を用いたボランティア募集は学生の目に留まりやすいことがわかる。手書きの掲示物を作っているが、時間効率の低さや読みやすさ・インパクトに欠けるため印刷に変更し、目にとめてもらえるように改善を図る必要がある。

次に多かったのが「知り合いから」であった。ボランティアに興味のない学生が情報を得るとすれば、友人など周りの人から誘われることで、きっかけになることが多いことがわかる。倉陵祭など、一般学生が他の友人を誘いやすいような環境から取り組みを行うことで、改めてボランティアに興味をもつことができるだろう。

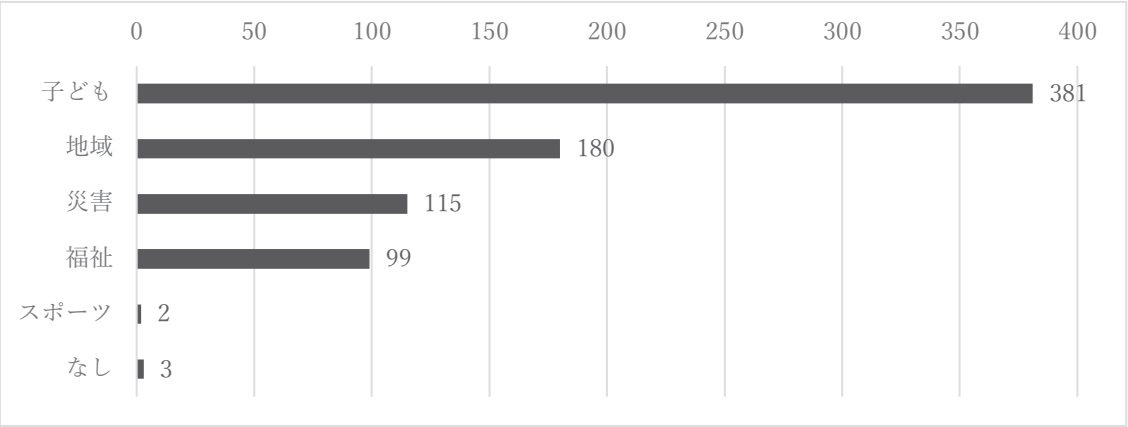
⑥今年度ボランティアに参加しましたか？

参加した	149 人
参加していない	338 人

ボランティアに参加した学生は約 3 割と少なく、あまり学生がボランティアに参加していないということが分かった。新型コロナウイルス対策の行動制限・自粛等でボランティア活動ができなかった期間が長期化したことにより、きっかけを得られない学生が多いので

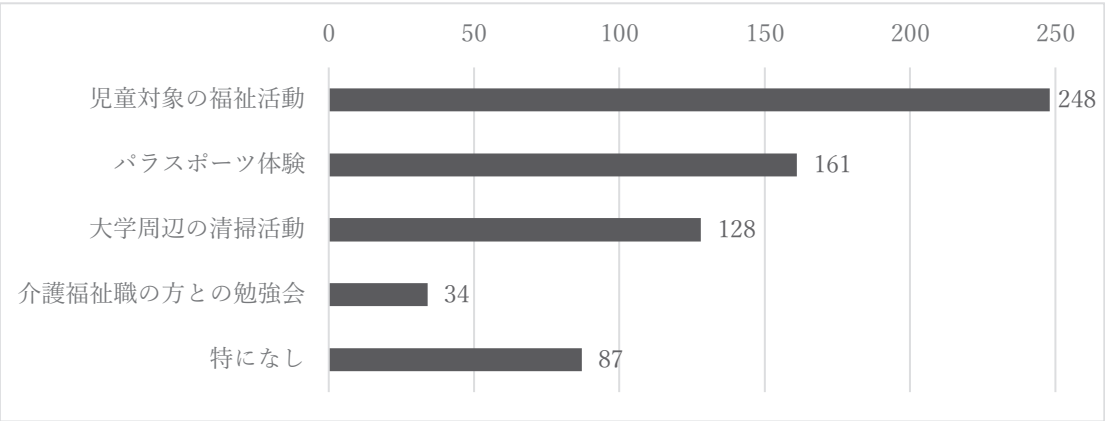
はないかと考えた。ボランティアに積極的な学生のサポートはもちろんだが、それ以上にボランティアに参加したいと思っている学生を増やすことが今後取り組んでいくべき方針である。

⑦今後参加してみたいと思う分野はどれですか？【複数回答可】



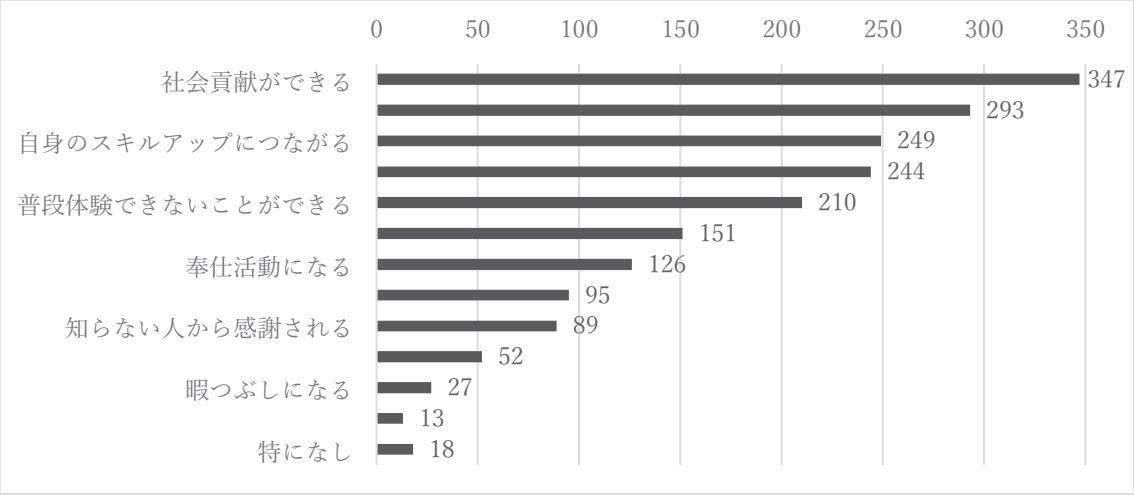
最も多かった回答が「子ども」に関するボランティアになる。次に「地域」に関するボランティアが多い結果となった。今回のアンケートでは教育学科の学生が多く回答していただいたということもあり、「子ども」のボランティアに参加してみたという学生が多いという結果になった。また、「地域」に関しては、講義で地域について学ぶ機会が多いことから、実際にボランティアを通じて体験してみたい学生が多いと考える。さらに近年では自然災害の増加や防災意識の高まりにより、「災害」に関するボランティアに参加したいと思う学生が増えていると考えられる。このことからこの３つのボランティアを積極的に取り入れることで、ボランティア参加者数を増やすことにつながると推測される。

⑧ボランティアルームスタッフは様々な企画を行っています。参加してみたいものはありますか？



今回最も多かったのが「児童を対象にした福祉活動」である。⑦の項目でも触れたが、教育学部の学生の回答が多かったことから児童対象の活動が多いということが考えられる。そのほかにも、「パラスポーツ体験」「大学周辺の清掃活動」の得票率が高く、興味を持っている学生が多いことから倉田山清掃の活動、パラスポーツ体験は今後も継続して行っていくべきである。しかし、興味を持っている学生が多い一方で参加人数は伸び悩んでいる。実施日や告知方法を見直し、興味から行動へと繋げられるようにルームスタッフ全員で考え、工夫する必要があると考える。
また「介護福祉職の方との勉強会」の興味が低い要因として、学生にとって専門職の方との勉強会と聞くと難しく構えてしまうことがある。心のハードルを下げる活動が最も必要であり、学生の興味を惹くことを優先した内容を職員の方々と打ち合わせする重要性を感じた。

⑨ボランティア活動に参加することでどのような事が得られると考えますか？



最も多かった意見が「社会貢献ができる」であり、次に「他者と交流できる」であった。多くの学生がボランティア活動は社会貢献であると認識していることになる。ボランティアの定義は「自発的な意思に基づき他者やや社会に貢献する行為」を指す。このことから、多くの学生がボランティアの意味や定義を理解しているということが分かる。
「他者と交流ができる」という意見では、社会貢献がボランティアと同等の意味を成しており、ボランティアに参加することが社会貢献になると考えており、他者と交流ができるということが学生にとっての一番の利点であるということが考えられる。今後ボランティアルームでは「誰」と「どのような」交流ができるのかを明確にし、学生に広めていくことが学生のニーズを満たせる上で大切になってくるだろう。
そのほかにも「自身のスキルアップができる」「自己 PR の材料に利用できる」「普段やらないことができる」といった意見の得票も多くあった。学生自身がボランティアを通して新たに知識・経験を得られるということも大事だということがわかる。ボランティア依頼

が来た際に、参加した学生が何を得られるか、どのように発信していくかを考えていくことがボランティアに参加する学生を増やすことにつながっていく。

⑩行ってみたいボランティア活動はありますか？
・子ども(幼児から高校生)に関わるボランティア
・災害ボランティア
・特別支援に関するボランティア
・学校現場でのボランティア
・スポーツ教室や地域のスポーツイベント
・ごみ拾いなどの奉仕活動
・海外ボランティア
学生の中には、将来子どもと関わる職に就きたい学生が多いことから、子どもと関わるボランティアをしたいという声が多くみられた。子どもに関するボランティア活動は現在も多く扱っているため、スタッフとしては情報の共有をしっかりと行い、学生が積極的に活動に参加できるようサポートを行う。またアンケート実施時期に能登半島地震が発生したことから、災害ボランティアへの関心度が高かった。全国の社会福祉協議会（社協）が能登半島の復興支援のために派遣されていることから、今後は社協の方々に直接お話を伺ったり、学生向けの助成事業について調査を行い、学内での掲示や情報共有を進めたりすることが必要である。さらに、学生自身が実際にボランティアとして現地に赴くなど、新たな活動の展開を検討していくことが求められる。さらに新型コロナウイルス感染症対策の緩和に伴いグローバルな活動を求める声も上がった。グローバルなボランティア活動は現在あまり扱っていないが、今後は積極的に取り入れる方向で対応を進めていきたい。

⑪ボランティアルームへの意見・要望
・伊勢市以外のボランティア活動の充実
・アットホームな感じにしてほしい
・ボランティアルームの活動内容の宣伝
・ボランティアルームスタッフへの加入方法　等
情報提供を望む声や、激励の言葉など前向きな言葉が多かった。新型コロナウイルス感染症対策の緩和により、本年度以上にボランティアに参加する学生が増えるだけでなく依頼も増加が予測される。ミスが出ないようにするためにルームスタッフのスキルアップ講座などで一般学生の対応方法、情報共有の重要さを示すべきである。また新規スタッフ希望者やルームの雰囲気をアットホームにしてほしいなどといった要望から、学生に対して開けたルーム作りが求められていると感じた。

4. 反省・今後の展望

今年度は昨年度と同様に Google Forms を利用し、許可を得た講義で QR コードを読み取ってもらい、回答という形で実施した。集計方法の反省点としては、配布した講義がルームスタッフの受講しているものであったため、回答していただいた学科・学部が偏ってしまった点である。学科が偏ってしまった点については、約 60%が教育学科の回答になってしまい、神道学科・国文学科に所属しているルームスタッフがいなかったため、回答が 10 件を下回る結果となってしまった。学年に関しては、3 年生・4 年生の講義数が少なく、講義を絞ることができず、4 年生に関しては講義での配布を行うことができなかった。3・4 年生で講義数が少ない学生は学校に来る回数も少ない。そのため、SNS での配布が重要になってくるだろう。ボランティルームに来てくれた学生に SNS の登録を勧めることを徹底する、ボランティアルームのスタッフだけでなく先生方にも協力を仰ぐことで、より多くの学科の学生にアンケートを回答していただけると考える。

これらの反省から来年度は班全体で協力し、内容と用紙の作成を早め、配布の許可を 12 月半ばまでには押さえておき、誰がどの講義で QR コードを配布するのかを明確にしておきたい。

今年度は昨年度に比べて、ボランティア募集依頼も多く学生と関わる機会があった。一方、関わっていない学生も多い中で今回のようなアンケートにも協力していただけた。これは、ボランテイアルームが学生から信頼を得ているという証拠である。

今年度の比にならないほど、来年度はボランティア募集の依頼が増加するだろう。その時にしっかりと情報を伝えることができるように報連相の徹底、情報発能力の向上など、対応ができるように今後もスキルアップに努めていきたい。

【文責：教育学部教育学科　2 年　村井かのこ】

4. 資料

令和５年度　ボランティアルーム学生スタッフ一覧

No	所属	学年	名前
1	文学部神道学科	4	國分　隆多
2	文学部国史学科		河西　一成
3			橋本　彩花
4	文学部国文学科		一橋　朋希
5			國分　大雅
6	文学部コミュニケーション学科		伊藤　なゆた
7	教育学部教育学科		大森　萌花
8			小芝　実結
9			田中　ゆ衣
10	文学部国文学科	3	酒井　杏菜
11	文学部コミュニケーション学科		竹内　七菜実
12			久保田　陵
13			田中　優陽
14	教育学部教育学科		井坂　安寿
15			石井　陽菜
16			大倉　すず
17			近藤　朱莉
18			篠原　広樹
19			中森　七海
20	現代日本社会学部現代日本社会学科		鎌田　真穂
21	文学部コミュニケーション学科	2	森下　くるみ
22			伊藤　美優
23	教育学部教育学科		青山　理伊音
24			澤村　佳純

25			薗部　萌果
26			田中　希彩
27			中西　加奈
28			原　一貴
29			村井　かのこ
30			村上　愛果
31			山口　真凜
32			吉岡　紗菜
33	現代日本社会学部現代日本社会学科		岩野　倖汰
34			奥田　匠
35			杉本　理沙
36			竹内　真穂
37			野澤　麻衣
38			山本　大貴
39	文学部国史学科		黒宮　悠那
40	教育学部教育学科	1	縣　愛心
41			伊藤　里愛菜
42			打田　桂花
43			榎本　萌
44			小川　真衣
45			坂本　叶
46			鹿間　柚花
47			松阪　美咲
48			森田　佳歩
49			山田　舞依